

きずなを はぐくんだ地

～ 握津地区、全戸移転へ～

上の写真は、荒川のさいたま市側の土手から^{あくづ}握津地区（古^{ふる}谷上）を写した物です。川越とは思えないほど、広々とした風景。点在するこんもりとした林の所には、住居があります。流れる時間まで、緩やかに感じられる場所……。そんな握津から、3月31日までに全世帯が移転します。

昨年12月に移転した斉藤さん一家と、10年前に移転した小島さん（右から2人目）。後ろに見えるのは斉藤さんの家です。移転してから、小島さんがよく来ていたこの家は、3月上旬に取り壊されます



左側が荒井敏夫さんと妻の正子さん、右側が荒井建彦さんと妻のとし江さん、手前は犬のハナコです。2月23日、残っているのはこの2家族。それでも、昔と変わらない会話がここにはありました



自治会館の縁側で、昔を振り返る自治会長の荒井建彦さん（左）と、荒井敏夫さん（右）

世帯数が減少し続けた平成十一年、当時の全世帯十八戸が床上浸水という大きな水害が発生しました。水害に悩まされ続けてきた握津の皆さんは、これを機に全戸移転の請願を国へ提出。ことしの三月三十一日までの移転が決まりました。

握津の皆さんは、ほとんどが兼業農家。家などの建物は取り壊さなければなりません、田畑は残ります。

川越市とさいたま市の間を流れる入間川と荒川。この二本の川を渡った所に握津地区はあります。かつては交通の要衝であり、昭和初期には八十戸、五百人が住んでいた握津。水害は多く発生しましたが、川と強く結びついていました。子どもは舟や浮き橋を使って川を渡り、学校へ通っていたそうです。

ところが昭和三十二年、上江橋が完成。小学校への通学路は、片道五キロ以上の道のりとなってしまいました。通学への不安から、子どもを持つ家は一軒また一軒と転居。平成に入ると、小学生以下の子どものほとんどいなくなりました。



移転したあとも続けられる農作業

この土地は、川が養分を含んだ土を運んでくるため、いい米ができるそうです。「住み慣れた土地を離れるのは寂しい。でもここを離れても、農作業をするためにみんな集まると思いますよ」と話す自治会長の荒井建彦さん（63歳）。

まちのできごと

川越市の面積は109.16km²

109パレット

スピードで、世界に挑戦

3月10日(金)から開幕する「2006年トリノ冬季パラリンピック競技大会」。市職員の遠藤隆行さん(27歳)は、アイススレッジホッケー日本代表の主将として出場します。「スレッジ」というそりを使用する点を除けば、普通のアイスホッケーとまったく同じ。「体と体がぶつかり合う激しさが、この競技の魅力。チームもいい状態です。自慢のスピードで、金メダルを目指します」と遠藤さん。活躍を期待しています。



2月7日、舟橋市長から激励を受ける遠藤さん



物を大切に作る心を、いつまでも持ち続けたいですね

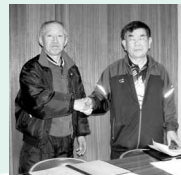
道具にも感謝の気持ち

針は、たくさんの物を生み出す手助けをする道具です。2月8日、針への感謝と裁縫技術の上達を祈願するため、蓮馨寺で針供養が行われました。古くなったり折れたりした針をこんにゃくなどの柔らかい物に刺すことで、針を休ませるという意味があるそうです。和裁をしている人や授業で裁縫をしている学生などが次々と訪れ、役目を終えた針に感謝していました。

小江戸サミット発、新たな交流

昨年10周年を迎えた小江戸サミットを機に、栃木市と川越市で卓球を通じた交流も深めようと開催された「友好協会発足記念フェスティバル」。2月25日、栃木市総合体育館(栃木市)で行われました。友好協会の調印式のあと、交流試合で熱戦を繰り広げました。「今回は両市の協会員だけの大会でしたが、今後は誰でも卓球を楽しめるような大会を開催したいですね」と川越市卓球連盟会長の小野滋さん(63歳・並木)。

栃木市卓球協会会長・須藤正弘さん(左)と調印後握手する小野さん



交流試合には川越市から30人が参加。新たな交流を楽しんでいました



コンクールの賞状とカップを手を。右から華藤誠さん・垣内さん・薄井さん・城康之さん

ビデオ作品だけでなく、コンクールに向けてラジオやドラマ作品も制作しています。「これから、よりよい作品を作っていきたいですね」と口をそろえる四人。次もすてきな作品を生み出すために頑張ってください。

この作品は五分間。設立当時の様子や、その保存活動と今後の活用について、住民の皆さんの声を中心に構成されています。「建物を見てその古さに驚き、歴史的に貴重な物だと知って、また驚きました」と話す、脚本担当で一年生の垣内太郎さん。撮影と録音を担当した二年生の薄井大さんは、「光のバランスを考えて撮影するのに苦労しました」と制作時の話をしてくれました。

放送機材が並ぶ六畳ほどの部屋で活動している同部。部員は四人です。昨年七月から十一月にかけて、旧川越織物市場を題材としたビデオ作品「明治からの贈り物」を制作。一月二十二日の第三回関東地区高校放送コンクールのビデオメッセー部門で最優秀賞を受賞しました。

県立川越高校放送部

かわいそ
川越
びと
22